学位論文要約

『赤い鳥』における語彙の研究

広島大学大学院　教育学研究科　博士課程後期
文化教育開発専攻　国語文化教育学分野

山田実樹

目次

序章　本研究の目的と方法
　第１節　研究の目的
　第２節　研究の方法
　第３節　本論の構成

第１章　『赤い鳥』について
　第１節　『赤い鳥』成立の背景とその特徴
　第２節　『赤い鳥』と標準語および国定教科書との関わり
　第３節　児童文学の中の『赤い鳥』
　第４節　『赤い鳥』の言語的特徴
　第５節　近代語研究における本研究の位置

第２章『赤い鳥』の童話における一人称代名詞
　第１節　目的と方法
　第２節　『赤い鳥』の童話における一人称代名詞
　第３節　国定教科書における一人称代名詞
　第４節　一人称代名詞からみた『赤い鳥』

第３章　『赤い鳥』の童話における二人称代名詞
　第１節　目的と方法
　第２節　『赤い鳥』の童話における二人称代名詞
　第３節　二人称代名詞からみた『赤い鳥』

第４章　『赤い鳥』の童話における〈父〉〈母〉を表す名詞
　第１節　目的と方法
　第２節　『赤い鳥』の童話における〈父〉〈母〉を表す名詞
　第３節　『赤い鳥』と同時代の作品における〈父〉〈母〉を表す名詞
　　第１項　CD-ROM 版『新潮文庫　大正の文豪』所収作品の場合
　　第２項　雑誌『太陽』の場合
　第４節　〈父〉〈母〉を表す名詞からみた『赤い鳥』

第５章　『赤い鳥』の童話におけるテシマウとそれに類する形式
　第１節　目的と方法
　第２節　『赤い鳥』の童話作品におけるテシマウとそれに類する形式

第 3 節　『赤い鳥』と同時代の作品におけるテシマウとそれに類する形式
第 1 項　『金の船』『金の星』の童話の場合
第 2 項　CD-ROM 版『新潮文庫　大正の文豪』所収作品の場合
第 4 節　テシマウとそれに類する形式からみた『赤い鳥』

終章　本研究の成果と今後の展望
第 1 節　本研究の成果
第 1 項　言語的特徴からみた『赤い鳥』
第 2 項　『赤い鳥』の近代語資料としての位置づけ
第 2 節　今後の展望

参考引用文献

資料一覧

序章　本研究の目的と方法

1　研究の目的

上田万年が『標準語に就きて』を発表した明治 28 年以後、東京語を精錬させて標準語の形を明確にしようとする動きが活発になった。その後、明治 37/1904 年に第一期国定教科書が刊行され、政府によって標準語が具体的に示されたことにより、日本語は一つの大きな転機を迎えたといえる。

その国定教科書が刊行されてから 14 年後の、大正 7/1918 年に創刊された子供向けの雑誌に、鈴木三重吉主催の『赤い鳥』がある。『赤い鳥』は、子供のための芸術としての童話や童謡を提供したいという理念を持って創刊され、その受容期は標準語が定着しつつある時期と、その読者は国定教科書の読者と重なっている。桑原（1975）[1]によれば、この雑誌の創刊者であり、選者でもあった鈴木三重吉は、当時刊行されていた子供向け雑誌に対して批判的な見方をしており、創刊に際して配布した「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」と題した文章において、一流作家の協力を得て文学的な雑誌を刊行していく旨を述べている。このような鈴木の理念に賛同した大人たちによって、『赤い鳥』は教育現場を中心に広く受容され、ある種の規範として子供達の学習材となった。

『赤い鳥』は、複数の作家による童話や昔話、科学読み物、読者投稿による作品や作文から構成されている。中でも童話が主要部分を占め、鈴木の執筆数が最も多いが、他にも芥川龍之介、小川未明等多くの作家が執筆している。『赤い鳥』による子供のための芸術性の追求は、当時他の子供向け雑誌と一線を画しており、その刊行によって『おとぎの世界』、『金の船』等類似の雑誌が多く出版され児童文学の祖として大きな影響を与えた。

『赤い鳥』は、標準語が確立した後に成立し、読者が国定教科書の受容者と重なっており、個々の作家・作品、または雑誌全体の語彙、文法、文体について調査・考察をなしうる資料である。さらに、雑誌が刊行されていた 18 年間という期間は、当時の雑誌の刊行期間としては長期に渡っており、この間の語彙、文法、文体の変化を捉えることも可能である。近代語研究において、児童を読者とする書き言葉資料に関する言語学的な研究は、明治から大正、昭和にかけて数多く刊行された子供向け雑誌に関してはまだ手薄である。『赤い鳥』も、綴り方指導に関する資料として国語教育の分野では多くの研究がなされているが、日本語学的調査はほとんどなされていない。『赤い鳥』の言語的特徴を明らかにすることは、近代語、あるいは児童文学の言語的特徴を明らかにすると共に、鈴木を中心とした作家たちの、童話作品に対する言語選定意識を明らかにすることにもつながる。『赤い鳥』に掲載され続けた、鈴木の標榜語が、実際にどのように作品に反映されているかは、鈴木自身もはっきりとは述べておらず定かではない。ただし、鈴木は『赤い鳥』に寄稿さ

[1] 桑原三郎（1975）『「赤い鳥」の時代―大正の児童文学―』慶應通信

れた多くの作家の作品に手を入れており、菅（1965）[2]も鈴木が文章にこだわって『赤い鳥』を編集していたことを指摘していることから、鈴木が作品中の表現や語彙に気を遣っていたことは確かである。

これらのことを踏まえて、本研究では以下のことを目的に研究を進める。

1．『赤い鳥』の言語的特徴を実証的に明らかにすること
2．近代語資料として『赤い鳥』とはどのような資料であるかを明らかにすること

1の目的のために、『赤い鳥』の中でも特に童話作品を調査資料として、一人称代名詞、二人称代名詞、〈父〉〈母〉を表す名詞、テシマウとそれに類する形式を調査項目とする。以下に、童話を調査資料とした理由と、童話を資料として調査する語彙項目として、この4項目を取り上げた理由を示す。

第一に、童話は『赤い鳥』の主要部分である点が挙げられる。鈴木は童話の執筆に熱心に取り組み、他作家の童話作品にも色々と手を入れていたことがわかっており、童話には『赤い鳥』を創刊した際に鈴木が掲げた理念や、『赤い鳥』に掲載される童話・童謡や読者によって投稿された児童の作文に鈴木が持っていた、選定・評価基準が表れていると考えられる。

第二に、子供のための童話は、話の構成がわかりやすくキャラクター設定が明確な場合が多い点が挙げられる。それぞれのキャラクターと密接に結びついている語彙項目として、一人称・二人称代名詞、親族名詞等がある。例えばある登場人物がどの一人称を使用するかは、その人物の社会階層や性格、性別、年齢等によって選択され、選択された一人称によってキャラクターが示される。読者である子供たちは、作品を読むことで一人称とキャラクターとの結びつきを学習し、登場人物を類型化して捉えられるようになったと考えられる。形式とキャラクターとの結びつきは、「役割語」[3]という観点から捉えることができる。金水（2003）によれば、明治・大正時代における種々の新たなマスメディアの登場は、「〈標準語〉の成立・普及に大いに力を与え」、小説等によって役割語も「育てられ、拡散されて」いったとする。『赤い鳥』もこれらの役割を担った媒体として捉えることができる。

『赤い鳥』は、大正期の児童を対象とした書き言葉の資料であり、たとえ会話文であっても、当時の話し言葉がそのまま反映されているとはいえない。しかし、『赤い鳥』の童話には、役割語を始めとする、当時ある程度社会の中で共有されていた言語慣習や、鈴木ら作家によって子供達が学ぶべき手本として新しく作られた用法が反映されているはずであ

---

[2] 菅忠道（1965）「『赤い鳥』の成立と発展」『赤い鳥研究』小峰書店

[3] 金水敏（2003,『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店）は、役割語について「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」と述べている。

る。さらに、一人称代名詞は時代と共にその使用が変化しており、標準語が制定され、言葉の体系が変化した時期の資料である『赤い鳥』にも、その変化の一端が表れていると考えられる。これは他の 3 項目についても同様のことがいえる。

また、2の目的のために、1で調査した結果をもとに、『赤い鳥』が近代語の資料としてどのように位置づけられるのかという点について考察する。もちろん本研究で取り上げる項目だけで、『赤い鳥』全体の言語的特徴を明らかにしたことにはならず、表記や語種、文法や文体等調査すべき項目は他にもある。しかし、本研究で取り上げる基本的な語彙項目によって、『赤い鳥』で使用されている言葉の実態を明らかにし、『赤い鳥』の資料性の一端を明らかにすることはできる。

2　研究の方法

本研究の目的に沿って、主に以下のような方法を取る。

1．『赤い鳥』全 34 巻 196 冊における童話作品を対象に、4 つの語彙項目について調査する。

2．1の調査結果をもとに、『赤い鳥』の言語的特徴を明らかにし、近代語資料として『赤い鳥』がどのような資料であるかについて考察する。

調査には、復刻版『赤い鳥』（1979 年、日本近代文学館）、CD-ROM 版『赤い鳥』（2008 年、大空社）を使用する。また、『赤い鳥』の資料性を明らかにするために、適宜同時代の他の子供向け雑誌や文芸作品を資料として使用する。本研究において使用した『赤い鳥』以外の資料に、1 期～6 期の国定教科書、CD-ROM 版『新潮文庫　大正の文豪』所収作品、『太陽コーパス』、『金の船』[4]がある。

第 1 章　『赤い鳥』について

1 章では、『赤い鳥』がどのような資料であるか、その概観を成立の背景や標準語・国定教科書との関わり等から述べる。

『赤い鳥』は、子供向けの雑誌として、大正 7/1918 年に鈴木三重吉が主宰となって刊行され、昭和 11/1936 年の廃刊までに延べ 196 冊が刊行された[5]。この雑誌によって、お伽噺から芸術的な近代児童文学への転回がなされ、教育界からも高い評価を受けて、社会

[4] 後に『金の星』に改題されている。本研究では、以後『金の船』『金の星』と表記する。
[5] 1923 年の 10 月号を関東大震災により全焼、12 月号を雑誌組合の協定により休刊、1929 年 2 月から 1931 年 1 月までの間一時休刊した。

に大きな影響を与えた。当時雑誌という媒体への評価が低い中で、他とは異なる芸術的な児童文学を求めようとしていた『赤い鳥』は、「芸術性のある教育を求めようとする」社会の動きと合致して、多くの親・教師の賛同を得た（王 2008）[6]。また、『赤い鳥』は「全国的に読者を持」ち、「教育者から迎えられ」、「関心を持った親たち」がこの雑誌を子供に与えて読ませていた（河原 1991）[7]。親や教師など、規範を生産する立場の人間がこの雑誌を評価したことは、この雑誌によって元々存在した言葉に関する様々な価値観や規範意識が強化され、あるいは新たに生産された可能性が高いことを示している。加えて、この雑誌が文学史上において高く評価されたことによって、それらの価値観や規範意識は後の社会でも一定の影響力を持って受容され、再生産されたと考えられる。

また、標準語が東京の知識層における共通語的な言葉をもとにして作られ、国定教科書は、標準語を具体的に示す教材として、子供たちに受容された。国定教科書と刊行期を同じくする『赤い鳥』は、書き言葉資料として標準語を反映しているであろうが、童話にみられる会話文には、実際の話し言葉が反映されていることも考えられる。また、『赤い鳥』が標準語をもとにして、童話の語彙を新たに創造した可能性もある。

第２章　『赤い鳥』の童話における一人称代名詞

一人称代名詞は、バリエーションが豊富で、性差や年齢、社会階層等の属性によって使い分けられるという点で日本語に特徴的なものである。特に書き言葉ではデフォルメされ、実際の話し言葉からは乖離した使用がなされることがあり、金水（2003）が述べるように役割語の一端を担っている。一人称代名詞の多くは、元々は現代共通語に比べて使用範囲が広く、使用者の性別や年齢も限定されていなかったが、歴史的変化の過程で使用者、使用場面が限定され、役割語として使用されるようになったと考えられる。

本章では、以下のような目的で、『赤い鳥』第一期（1918～1929 年）22 巻 127 冊の主要作家による童話作品と、『赤い鳥』と刊行期・受容者の重なる国定教科書を対象に、一人称代名詞に関する調査・考察を行った。

１.『赤い鳥』主要作家の童話作品において、一人称代名詞のバリエーションとその用法を、鈴木三重吉を中心に明らかにすること。

２．１をもとに、一人称代名詞の変化の過程を捉え、『赤い鳥』が近代語資料としてどう

---

[6] 王瑜（2008）「『赤い鳥』に関する研究―大正期日本創作児童文学の一側面として―」『同志社国文学』69 号

[7] 河原和枝（1991）「『赤い鳥』の子どもたち―誕生期の「童話」に現れた＜子ども＞像―」『年報人間科学』12 号

位置付くのかを考察すること。

その結果、次のことが明らかになった。

まず、『赤い鳥』における一人称代名詞は、バリエーションが豊富である。特に鈴木三重吉を中心に、多くの形式を使い分けることによって、キャラクターをより細かく分類し、童話の中で描くキャラクターの幅を広げていたと考えられる。また、アタクシを社会階層の高い女性が、アタチを幼い女の子が、ボクを少年のみが、オイラ・オラを方言を話す、都市から離れた田舎に住む社会階層の低い人物が使用する等、その用法は、現代日本語のフィクション世界における一人称代名詞の用法と概ね一致しており、これらの形式は役割語として使用されていた。同時期の資料を扱った先行研究では、オラ、オイラ、ボク等に役割語の素地がみられる。しかし、これらの形式は『赤い鳥』にみられるような役割語としての統一的な使用はなされていない。

また、国定教科書との比較でも、『赤い鳥』の方が形式のバリエーションが豊富であった。国定教科書でみられず、『赤い鳥』で使用されている形式の多くは、役割語として使用されていることがわかった。ここから、国定教科書が一人称代名詞の基本的な用法を示し、『赤い鳥』がフィクション世界における、形式とキャラクターを結びつけた役割語としての一人称代名詞の用法を示したといえる。『赤い鳥』と国定教科書において、使用されている一人称代名詞の用法に大きな差はみられないことから、一人称代名詞の用法自体には揺れがなかったと考えられる。しかし、役割語として使用する一人称代名詞の多寡に、両者で違いがある。『赤い鳥』は、一人称代名詞を役割語として使用することによって、童話の内容を豊かにし、フィクション世界における一人称代名詞とキャラクターとの結びつきを示し、受容者である子供たちは、『赤い鳥』の作品を通して、一人称代名詞とキャラクターとの結びつきを学習したと考えられる。

第３章　『赤い鳥』の童話における二人称代名詞

二人称代名詞は変化の過程において待遇価が落ち、現代共通語ではどの形式も目上に対して使用しづらくなっている。特に、明治後期・大正期における二人称代名詞の用法と、現代共通語における二人称代名詞の用法を比較すると、『赤い鳥』の刊行期は、ちょうど二人称代名詞の待遇価が変化した時期に位置している。例えば、永田（2008a、2008b、2009）[8]の調査結果によれば、アナタが、明治後期・大正期東京語では目下から目上に使用されて

[8] 永田高志（2008a）「国定教科書の対称詞」『国語と国文学』85 巻 3 号
永田高志（2008b）「明治後期・大正期東京語の対称詞」『日本文化の鉱脈―茫洋と閃光と―』風某社
永田高志（2009）「総合雑誌『太陽』に見る対称詞」『国語と国文学』86 巻 9 号

いるが、国定教科書では、親族間の目上には使用されていない。永田（2008a）は、国定教科書を明治後期・大正期東京語の話し言葉における対称詞の用法とは異なる規範的な体系を示すもの、その他の同時代の資料を明治後期・大正期東京語の話し言葉における対称詞の用法が反映されたものとして捉えており、これらの資料の中に『赤い鳥』がどのように位置付けられるのかは、『赤い鳥』の資料性について考える上で重要な視点となる。

本章では、『赤い鳥』の童話作品における二人称代名詞のバリエーションとその用法を明らかにし、『赤い鳥』でみられる二人称代名詞の用法が、歴史的変化の過程でどのように位置付くのかについて考察することを目的としている。

調査は、『赤い鳥』前期（1918～1929）22 巻のうち、奇数巻 11 巻、64 冊における鈴木三重吉の童話 56 作品 88 話、及び鈴木以外の作家の童話 364 作品 419 話[9]を対象に行った。

調査結果から、『赤い鳥』において特筆すべき二人称代名詞に、キミとアナタがある。

キミは、明治以降、書生言葉を中心に広まった際には、目上にも目下にも対等にも使用される、上下に気を遣う必要のない形式であった。しかし、現代共通語では、同等もしくは目下に使用され、同等での使用でも尊大にうつる場合がある（飛田 1981、荒木 1998、大髙 1999）[10]。ここから、近代から現代にかけて、キミが目上に使用できなくなったと考えられるが、その時期は定かではない。『赤い鳥』では、すでに目下から目上へキミが使用されている例はみられず、『赤い鳥』が、キミが目上に使用できなくなったことを示す初期の資料といえるかもしれない。

アナタは、『赤い鳥』では、目上の親族には使用されていないが、親族以外の目上に対しては使用されていた。現代共通語における、親族を含めた目上の人物に対してアナタを使用できないという用法は、永田（2008a、2008b）によれば、国定教科書にすでにみられるが、明治後期・大正期東京語ではまだ定着していない。『赤い鳥』では、目上の親族にはアナタが用いられていないが、身分の上下がある場合の目上や、臨時的な上下差のある関係での目上には、アナタが使用されている。すなわち『赤い鳥』のアナタの用法から、「目上に対してアナタを使用することができない」という現象が、親族関係において先に起こったことがわかる。アナタの用法の変化の過程が、『赤い鳥』では、言語内的要因による共時的変異として表れているといえる。

---

9 これらの地の文において、二人称代名詞の使用はみられないため、会話文における二人称代名詞の用法を調査したことになる。

10 飛田良文（1981）「書生の敬語」『国文学』26 巻 2 号
荒木雅實（1998）「人称代名詞の史的変遷について」『拓殖大学日本語紀要』8 号
大高博美（1999）「日本語における対称指示語彙選択のストラテジー」『言語と文化』2 号

第４章　『赤い鳥』の童話における〈父〉〈母〉を表す名詞

〈父〉〈母〉を表す名詞について、先行研究では主に以下のことが明らかになっている。

１）明治 37/1904 年刊行の第一期国定教科書によって、オトウサン/オカアサンという形式が広く浸透した（亀村 1955、白木 1973、井上 1985、清水 1987）[11]。
２）当時の山の手言葉を反映していると思われる小説等で最もよく使用されていた形式は、オトッサン/オッカサンであった（亀村 1955、井上 1985、木越 1999 等）[12]。
３）明治 37 年以前には、オッカサンが社会階層の高い人物に対しても使用されていた（亀村 1955、井上 1985、木越 1999）。

しかし、第一期国定教科書以降〈父〉〈母〉を表す名詞の体系がどのように変化したか等、江戸語、東京語、標準語に限っても、未だ明らかになっていない点は多い。

以上の点を踏まえて、本調査では主に以下の 2 点を目的としている。

１．『赤い鳥』において〈父〉〈母〉を表す名詞にどのようなバリエーションがあり、それぞれの形式がどのように用いられているのかを、鈴木三重吉を中心に明らかにすること。
２．１の結果をもとに、『赤い鳥』が近代語資料としてどう位置づき、どのような役割を果たしたかについて考察すること。

調査は、『赤い鳥』全巻の中から、前期全 22 巻 127 冊における鈴木三重吉の童話 173 作品と、前期各巻 1 号 22 冊における鈴木以外の作家の童話 149 作品、および CD-ROM 版『新潮文庫　大正の文豪』所収作品を対象として行った。

調査の結果、〈父〉〈母〉を表す名詞は、『赤い鳥』において、オ｛トウ/カア｝サンを標準として、オ｛トウ/カア｝サマと｛トウ/カア｝サマが上位、オ｛トウ/カア｝サンが上位～下位、｛トウ/カア｝サンとオ｛トッ/ッカ｝サンおよびオトッツァンが下位の社会階層を示して使用されていた。すなわち、オ｛トウ/カア｝サマと｛トウ/カア｝サマは、接頭辞のオの有無に関わらず上位の階層を示すが、オ｛トウ/カア｝サンと｛トウ/カア｝サンでは、接頭辞のオの有無によって異なる階層を示す。

---

[11] 亀村五郎（1955）「「お父さん」「お母さん」の歴史」『実践国語』16 巻 174 号
白木進（1973）「標準口語としての「おとうさん」・「おかあさん」の成立過程」『国文学研究』9 号
井上敏夫（1985）「教科書に見る「父」「母」の呼称」『月刊国語教育研究』11 号
清水康行（1987）「オトウサン・オカアサン―近代の親族呼称―」『国文学解釈と鑑賞』52 巻 2 号

[12] 木越昌子（1999）「親族名称の変遷―「おとうさん」「おかあさん」を中心として―」『国文学解釈と鑑賞』64 巻 7 号

一方、同時代の他の文芸作品では、『赤い鳥』において下位の社会階層に属する人物に使用されている｛トウ/カア｝サンとオ｛トッ/ッカ｝サンが、上位の階層の人物にも使用されており、オ｛トウ/カア｝サンより、オ｛トッ/ッカ｝サンの使用が多かった。

これらの結果から、『赤い鳥』では、国定教科書が示したオ｛トウ/カア｝サンという形式を標準として、〈父〉〈母〉を表す名詞を使用しており、同時代の他の文芸作品に比べて、言語変化を先取りしているといえる。また、〈父〉〈母〉を表す名詞を、接頭辞のオの有無と、サマとサンの違いとによって階層ごとに体系的に使用している点からは、登場人物の属性と〈父〉〈母〉を表す名詞を結びつけ、童話における〈父〉〈母〉を表す名詞の用法を示したといえる。『赤い鳥』は、〈父〉〈母〉を表す名詞を形式と社会階層を結びつけて体系的に用いている点で特徴的であり、用法が変化したことが分かる初期段階の資料といえる。

第５章　『赤い鳥』の童話におけるテシマウとそれに類する形式

本章で取り上げる「食べテシマウ」のようなテシマウは、チマウ・チャウの縮約形を持ち、それぞれの形式が活用形を有して使用されている。テシマウは江戸語にすでにその使用がみられるが、チマウ・チャウは明治の初頭から使用されるようになった比較的新しい形式である。『赤い鳥』の刊行時期は、ちょうどチャウの活用形が完備したとされる時期と重なっており、『赤い鳥』は、チマウ・チャウの移り変わりの一端を捉える資料となる。また、その変化を捉えることは、『赤い鳥』の資料性を明らかにすることにも繋がる。これらの点を踏まえて、本調査では主に以下の二点を目的としている。

１．テシマウ・チマウ・チャウの言語変化の一端を捉えるために、これらの形式が『赤い鳥』の作品中でどのように使用されているかを明らかにすること。
２．１を通して、『赤い鳥』の近代語資料としての特性をとらえ、その位置づけについて考えること。

調査は、『赤い鳥』全 34 巻 196 冊の童話作品、鈴木三重吉 242 話、鈴木以外の作家 183 人 1040 話、および『金の船』『金の星』奇数巻 11 冊における 56 作家 92 話、CD-ROM 版『新潮文庫　大正の文豪』所収作品における 9 作家 134 作品を対象として行った。

その結果、以下のことが明らかになった。

まず、チャウについて、『赤い鳥』では、時代が下るほどその使用数が増え、使用されている活用形に幅が出てくる。CD-ROM 版『新潮文庫　大正の文豪』所収作品でも、同様の傾向がみられる。チャウの活用形が完備された時期と、『赤い鳥』の刊行期、CD-ROM 版『新潮文庫　大正の文豪』所収作品の初出年は重なっており、この時期にチャウの活用

形の幅が広がったと考えられる。

次に、チマウとチャウが、『赤い鳥』で特徴的に用いられている。チマウは社会階層の低さや話し手あるいは発話内容の乱暴さを示す形式として、チャウは幼さや可愛らしさと結びついて子供や小動物が使用する形式として使用されている。

一方『赤い鳥』以外の資料では、チマウ・チャウとキャラクターとの結びつきはみられなかった。チマウは先行研究によれば、大正初期にはぞんざいさと結びついていたが、その役割語としての使用は梁井（2009b）[13]の戦後のシナリオまでは確認されていない。李（2003）[14]によれば、明治時代の文芸作品ではチマウ・チャウ共に年齢も社会階層も多種多様な人物によって使用されており、チマウは大正～昭和初期までの間に役割語としての用法を確立したと考えられる。『赤い鳥』におけるチマウの用法をみると、他資料との比較からも明らかなように形式とキャラクターとが結びついた統一的な使用がされ、かなり役割語に近づいている。また、チャウについても『赤い鳥』において幼さや可愛らしさと結びついて使用されており、チマウと同様のことがいえる。チャウの役割語としての使用について言及したものは管見の限りみられないが、これは現代日本語のフィクション世界におけるチャウに対する感覚とも合致するものである。『金の船』『金の星』や CD-ROM 版『新潮文庫　大正の文豪』では、チマウ・チャウを使用する話し手の性質や発話内容、社会階層の高低にばらつきがあること等から、当時チマウ・チャウの使用によって想定されるキャラクターには幅があり、その一部を『赤い鳥』が取り入れたと考えられる。『赤い鳥』がチマウ・チャウを使用した際のキャラクターのイメージを固定し、役割語への一端を担ったといえる。

終章　本研究の成果と今後の展望

終章では、2 章から 5 章で取り上げた 4 つの語彙項目から、『赤い鳥』の言語的特徴について述べ、それらの結果をもとに『赤い鳥』の近代語資料としての位置づけについて考察する。それぞれの語彙項目からみると、『赤い鳥』について以下のような指摘が可能である。

1．『赤い鳥』は、その刊行期に起こった語彙の変化を反映している。
2．取り上げた語彙の変化を『赤い鳥』が反映している場合、その変化は、同時代の他の文芸作品よりも進んだ状態にある。

2 について、『赤い鳥』が同時代の他の文芸作品と異なった結果を示していることは、『赤

[13] 梁井久江（2009b）「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5 巻 1 号
[14] 李徳培（2003）『ちまう・ちゃう考―明治時代の使用実態についての社会言語学的研究―』J&C

い鳥』が共時的にみて特徴的な資料であり、鈴木三重吉を中心に、独自の言語選定意識にもとづいて使用語彙を決定していたことを示している。

１、２から、『赤い鳥』には、語彙変化そのものが現れている部分と、独自の語彙使用によって、童話の語彙体系をリードした部分があるといえる。

『赤い鳥』によく似た特徴を示している国定教科書は、標準語を示し自らが規範となって言語変化を動機づける媒体であったといえる。本研究によって、その国定教科書の語彙使用と『赤い鳥』の語彙使用は矛盾しないが、『赤い鳥』の方が語形のバリエーションが豊富であることが明らかになった。児童文学の語彙という点から考えると、語形のバリエーションを豊富にすることによって、作品中に多彩な人物を登場させ、童話というフィクション世界の言葉の創造に取り組んだことがうかがえる。その最も特徴的な例は、本研究で取り上げた、それぞれの語彙項目における、役割語に近づく統一的な語彙の使用である。児童文学の語彙という点から考えると、語形のバリエーションを豊富にすることによって、作品中に多彩な人物を登場させ、童話というフィクション世界の言葉の創造に取り組んだことがうかがえる。その最も特徴的な例は、本研究で取り上げた、それぞれの語彙項目における、役割語に近づく統一的な語彙の使用である。『赤い鳥』では、国定教科書が示す標準語に準じることによって意思疎通性を担保しつつ、語形のバリエーションを豊かにして、多様なキャラクターを表現することに成功している。『金の船』『金の星』との比較からは、『赤い鳥』の語彙の使用の方がより統一的であることが分かっており、童話の書き言葉においても、規範を示そうとしたのかもしれない。

今後、語彙はもちろんのこと、文法、文体に関して等、さらなる言語学的調査を進め、国定教科書や同時代の他の文芸作品、子供向け雑誌等、他資料との比較を行うことによって、『赤い鳥』がどのような資料であり、どのような言語的特徴を持っているのかを、さらに明らかにしていきたい。また、言語学的調査から得られた知見を、『赤い鳥』の童話にみられる、登場人物の人物像や挿絵等の解釈に活かすことによって、社会学や児童文学等、関連する分野の研究に資することができると考える。これを今後の課題としたい。

資料

全章を通して、『赤い鳥』復刻版（1979）日本近代文学館、『赤い鳥』CD-ROM 版（2008）大空社を使用した。それ以外に本論文執筆にあたって使用した資料を章ごとに以下に示す。

二章

・国立国語研究所編『国定読本用語総覧』CD-ROM 版（1997）三省堂

四章

・『新潮文庫　大正の文豪』CD-ROM 版（1997）新潮社

・国立国語研究所編『太陽コーパス ―雑誌『太陽』日本語データベース―』（2005）博文館新社

五章

・斎藤佐次郎監修『金の船＝金の星　復刻版』（1983）ほるぷ出版

・『新潮文庫　大正の文豪』CD-ROM 版（1997）新潮社